特別企画

オンライン座談会

農村交流の火をつなぐ

道内では修学旅行生の農業体験受け入れや農家民泊など農村交流が進んできたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、休止を余儀なくされている。農村交流の火をいかにつなぐべきか―。修学旅行受け入れなどを行う企画会社代表・中田浩康さんを司会に、農家民宿を営む江面暁人さん、教員対象の農村ホームステイを行う北海道農協青年部協議会会長の村田辰徳さんに現状や今後を語り合ってもらった。（編集部）

コロナで修学旅行も民宿も受け入れ中止に

中田　まず自己紹介を。東川町で体験型観光企画会社をしています。2005年から修学旅行のファームステイ受け入れを始め、今年は15年目の節目でしたが、コロナでストップ。15校中12校がキャンセルになり、残りが日帰り農業体験や冬のファームステイで検討中です。昨年は約2000人受け入れました。

その他、地域資源を活用したネイチャー体験などのプログラムを提供して地域にお金を落とす仕組みづくりをしています。今年は一般観光客の受け入れも2月末から全部キャンセル。非常事態宣言が解除されても予約が増えているわけでもなく厳しい状況です。

江面　29歳の時に北海道で農業がやりたいと一念発起して移住し、3年間の研修後に遠軽町白滝で独立。42㌶の畑作経営の他、ネット販売や農家民宿えづらファーム、農業体験、住み込みボランティア、企業研修の受け入れをしています。コロナの影響が出始めたのは3月ぐらい。3月はキャンセルが約半数で、4月以降は農家民宿は全てキャンセルに。去年は3月から5月の3カ月で農家民宿に103人来ましたが、今年は3月が42人、それ以降はゼロ。去年は延べ約450人が宿泊し、うち4割が海外客でした。

企業研修もキャンセルまたは延期に。うちは労働力として住み込みボランティアも年間80人ほど受け入れていますが、今年はぐっと減ると思います。その分、長期滞在や道内の方を中心に受け入れ、何とか賄っている状況です。

村田　高校卒業後に実家で就農し、幕別町で約40㌶の畑作・野菜経営をしています。昨年度から北海道農協青年部協議会の会長になり、今年二期目です。

JA幕別町青年部の頃から農業に関心のある人に一泊二日で農業体験してもらう農村ホームステイ事業をしていました。十勝地区農協青年部協議会では帯広畜産大学や北海道大学の学生対象の農業体験やホームステイを。現在、会長を務める道青協では10年ほど前から学校の教員に農村ホームステイしてもらい、先生から子どもたちに農業や食の大切さを伝えていただく取り組みをしています。北海道教育委員会と連携し、栄養教諭の新任研修に農村ホームステイも入れていただいています。近々、全道12地区の青年部長が集まって会議しますが、今年度の受け入れは厳しいと感じています。その他に、十勝のNPO法人「食の絆を育む会」で行う修学旅行生の農村ホームステイの受け入れ農家もしています。

コロナに関して私個人の話ですが、感染がピークだった4、5月に、友達から「十勝川温泉で働く19歳の子に仕事はないか」と聞かれ、農作業に来てもらったところ非常に助かりました。本来ならホテルも書き入れ時。コロナがなければこんなこともなかった。何よりバイト代を払った時の彼の笑顔を見た時に良かったなと思いました。

中田　農業への影響は。

江面　畑作に関して言うと、今のところ大きな影響はないです。ただ外食産業向けの野菜などをつくる人は非常に大変と聞いています。輸入の機械や資材もなかなか入ってこないようです。

村田　うちは馬鈴しょのほとんどが加工用です。先日、農協職員に聞いたところ「ポテトサラダ用は主にインバウンド（海外観光客）向けのホテルなどに出ていて、今は物がほとんど動かない。昨年の秋に収穫したいもが12月まで残りそう」とのこと。農協の冷蔵庫が空かないということは、今年の秋に収穫したいもを入れる所がない。担当者も頭を悩ませています。一方、ポテトチップス用は家庭用消費が伸びて取り合いに。同じいもでも明暗が分かれたなという感じです。

厳しいホームステイ型 今はつながりの強化へ

中田　今、旭川近郊に100件ほど農家民泊の登録農家がいます。4月のアンケートでは3割が「受け入れ可能」だったんですが、つい先日（6月上旬）のアンケートでは1割ないくらい。では旅行会社や学校にどう説明するか。実は、受け入れ側が旅行会社などに対する断りのルールを、この15年間つくっていませんでした。新たなマニュアルをつくらなければならない。15年の節目に、農家に本音を聞きながら受け入れ態勢を整備していきたい。

「食の絆を育む会」では今年は1校も受け入れないと聞いていますが。

村田　役員じゃないので詳しくは分かりませんが、聞く限りでは早い段階から「命を守ること」を強調。受け入れ中止の方向で進んでいます。

中田　江面さんはルールなどをつくっていますか。

江面　基本的に国や道の指導に基づいた対応を取っています。現時点では宿泊の受け入れはしていませんが、7月10日以降の仮予約を受け付けています。ただし、緊急事態宣言が発令される状況になればキャンセルが前提。今までは母屋の2階に泊まるホームステイと、隣の空き家を一棟貸しするスタイルがありましたが、一棟貸しだけにしてセルフチェックイン・チェックアウトできるようにしました。玄関前にキーボックスを置き、暗証番号を入れて鍵を取ってもらうことで、客と接することのない状況をつくれます。

住み込みボランティアの1人は今シーズンずっといる方で、コロナ禍の直前に来ることができ、とても助かっています。それ以降の応募や来る予定になっていた人は全てキャンセルに。ただ、これも行政の要請に応じて、道内もしくは札幌圏外の応募のみなど、状況に合わせて変えてきました。いずれも渡航履歴や過去2週間の体調、同居家族の体調不良者はいないかを把握した上で受け入れ。住み込みボランティアは母屋の2階に住んでいます。

中田　修学旅行の場合は家庭に人を入れる形になります。村田さんの中にやはり不安はありますか。

村田　ありますね。みん

6月8日にオンライン会議システムを使い座談会を開催。上段左から中田さんと村田さん、下段が江面さん

なかだ　ひろやす
2005年から修学旅行の農業体験受け入れの他、体験プログラムの企画・運営、地域と観光客をつなぐコーディネートなどを行う。12年から現職。1975年栃木県生まれ。

㈲アグリテックがコーディネートした農業体験や体験プログラム

な家族にうつすかもという不安を抱えています。

中田　3密を避けるルールづくりも難しい？

村田　そうですね。ホームステイは一緒にご飯を食べて、一緒に仕事をして農業や農村の良さを伝えてきたので、それができないということは今後どう事業をしていけばいいか。いい知恵が出てきません。

中田　うちも道庁や食の絆を育む会など受け入れ団体と一緒に、農家が安心して受け入れできる統一マニュアルをつくれないかと話しているところです。

往来できない中、オンラインなどの取り組みは。

江面　これからジャガイモの花が咲いたり、小麦が黄金色に変わったりするタイミングで「畑のツアー」をオンラインで提供できないかと考えています。実際、農場ピクニックを提供する「いただきますカンパニー」がオンラインでガイドツアーを始めています。

村田　全国に先駆けて北海道がコロナの影響を受けた時、近畿の青年部がSNSを使って牛乳の消費拡大運動をやってくれました。その時、北海道の酪農家の仲間が「本当にうれしい。今度は私たちが花農家のために運動を起こそう」となりました。こういう「人と人のつながり」を感じると、青年部に入って本当に良かったと思います。

教員受け入れに関しては、今まで受け入れた先生たちも休校になり困っている中、例えばですが、花き農家がつくった花に応援メッセージを添えて渡すなど、今までのつながりを強化する機会にしたい。会議でも提案していきます。

中田　一期一会ではなく二会、三会になるよう継続が大切ですね。

リモートワークなどを受け入れるチャンス

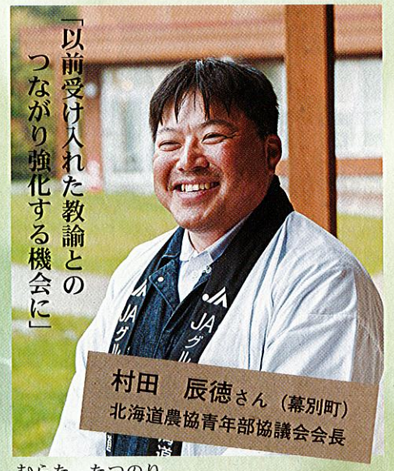
中田　今年3月に大きな見直しがありました。

村田　食料・農業・農村基本計画ですね。

中田　そうです。食料自給率目標45％と、農村交流を両輪にしていくことになりました。JAや青年部の意見も反映されたと思いますが、道青協の対応は。

村田　私たち青年部は5年先、10年先の農業を支えていく世代なだけに、非常に興味を持って勉強してきました。訴えてきたことが基本計画に盛り込まれたのは大きい。ただ、自給率目標も実現しないと意味がない。限られた労働力の中では今後スマート農業なども必要です。道青協は道内の農家の声を国に届ける責務があります。今後も現場の声を伝えていきたい。

中田　農村交流で新たな展開は考えていますか。



「以前受け入れた教諭とのつながり強化する機会に」

村田　辰徳さん（幕別町）
北海道農協青年部協議会会長

むらた　たつのり
40haで畑作4品とながいも、はくさい、かぼちゃ、ごぼうを作付け。JA幕別町青年部長、十勝地区農協青年部協議会会長を経て、2019年から現職。1982年幕別町生まれ。

江面　今後需要の揺り戻しはインバウンドを含め必ず来ると思っています。特に企業は今回の件で働き方が大きく変わろうとしている。ワークとバケーションの造語の「ワーケーション」、テレワークなどで、農村や地方は再び注目を浴びるチャンスです。インターネット環境が整っていることが前提になりますが、3密ではない地方に長期滞在して仕事を行うなどのニーズが高まってくるのではないでしょうか。そこに対応できる仕組みをつくっていきたい。1棟貸しに滞在してもらいながらリモートワークしていただくなど。企業と提携し福利厚生農場として農村にステイしてもらい、半分働きながらリフレッシュしてもらうのもありではないかと思っています。

中田　江面さんは脱サラ組。農村や農業の魅力は。

江面　一言でいえば「人間的な生活ができること」だと思います。季節や天気、気温の変化を直に感じることは都会のサラリーマンではできない。月の光で自分の影ができることを、ここに来て初めて知りました。農業もやりがいがあります。経営者として自分で何でも決断できる。自分の裁量でトライ&エラーを繰り返しながら経営できるのは大きなやりがいです。

道青協では農業や食の大切さを伝えるため教員対象の農村ホームステイ事業を行う

中田　村田さんは高校卒業後に就農されました。

村田　実は9歳の時に母が亡くなり、父は私と妹を抱え経営。少しでも力になりたいと思って就農しました。ただ一つ、引っ掛かっていたのは、父は高校卒業後、10年間自衛隊に勤務。私も他の職業を経験してみたい気持ちが正直ありました。人に使われる側を経験したいと思い、19歳から10年間、週3回コンビニで夜間バイトしながら農家をしていました。

中田　やはり、農業をやっていて良かった？

村田　それはもちろんです。自分が育てた作物をおいしいと食べてもらえる。それを見た時、何よりも農家をやっていて良かったと思えます。

中田　実は僕も栃木の専業農家の長男ですが、「農業を応援したい」「農業を将来なりたい職業ナンバーワンにしたい」という思いで修学旅行の受け入れや農村交流をやっています。

江面さんの話にもありましたが、コロナ禍の影響で都市と田舎の二極共生が前向きに検討されています。東川でも大雪山国立公園内のホテルが休業する中、ワーケーションの受け入れ体制の整備や、都市部から来てリモートワークする人に農業体験などを提供し農業の応援団づくりができないかを検討中です。集団的移動ではなく、ファミリーなど個人的な移動でできないかと思っています。

距離保ちながら交流 新たなルールづくりを

中田　地域に人が来てもらうのに必要なことは。

江面　白滝は農家戸数自体少ないんですが、新規就農を希望する人もいます。そういった方がここに来たがる理由は「何もないから」。白滝は観光資源が豊富な地域ではありません。ガイドブックにもなかなか載らない。そういった中で農村交流を含めた人の呼び込みについては、あまり手を加えずにいった方がいいのではないでしょうか。施設をつくったり大きなイベントをしたりするのではなく、ソフトの面で魅力付けをして、人が来る仕組みづくりをしていってほしい。そのためには受け入れ側の体制づくりも必要です。農家民宿や住み込みボランティアをやる姿を見せていくのも一つの手ではないかと思っています。

村田　幕別にも新規就農の人がいますが、仲間づくりをして地域にしっかり根付いています。新規就農に関しては来る人も、来てもらう地域もお互い歩み寄りが大事だと思います。

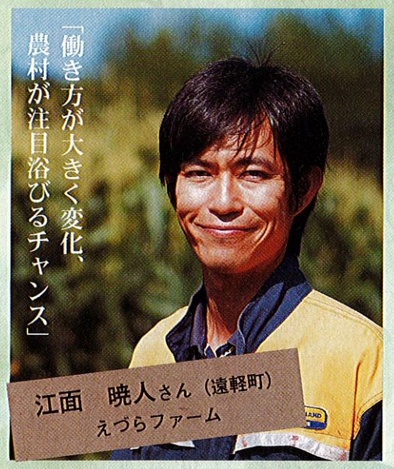
中田　農家民泊や農業体験はそれ自体が目的ではなく、「農業や農村の魅力」「農業や食の大切さ」を伝えたいというのが出発点。「人が来られないからやめる」ではなく、新たな角度で魅力をどう発信するか、人とどうつながっていくかが大切だと思います。

私が思う農村交流は次のようなものです。「他火（たび）」という言葉があります。自分の心の火が揺らいでいる時に、同じ考えを持つ人の心の火に当たりたくなり、人は動く。その火に当たって、もう一度奮起するのが民俗学でいう「旅」です。

コロナ禍で心の火が揺れる中、農業や農村に思いを寄せる人、または同じ農業者同士、その火を燃やし合いたい。ただあまり近くで燃やすと「災」になるので、ソーシャルディスタンス（社会的距離）を取りながら、人と人のつながりを持つことが「農村交流の火をつなぐ」ことになるのではないでしょうか。

同時に地元で受け入れのルールづくりもやっていかなければなりません。新たな生活様式「新北海道スタイル」のように、「新北海道農業・農村スタイル」をつくり上げていく必要があるのではないでしょうか。

（木田　ひとみ）



「働き方が大きく変化、農村が注目浴びるチャンス」

江面　暁人さん（遠軽町）
えづらファーム

えづら　あきと
東京の人材系企業で働き、新規就農を目指し29歳で北海道へ。2012年就農。42haの畑作経営。農家民宿経営や農業ボランティア、企業研修も受け入れ。1979年和歌山県生まれ。

農家民宿やボランティアには国内外からやって来る。「何もない」のがここの魅力だ